

亡命者の交差点：1950年代パリのレーミゾフのアパートで

小 椋 彩

はじめに

アレクセイ・レーミゾフは1921年8月に革命と内戦で混乱の続く祖国を離れ、およそ1年のベルリン滞在を経てパリに渡ると、35年もの歳月をこの地で暮らし、1957年11月、故郷への帰還を夢見ながら客死した。作家はナチス・ドイツのパリ占領も、1943年の最愛の妻の死も、パリのブアロ通り（улица Буало）のアパートで迎えた。その居間は、壁に鳩時計が掛かっていたことから、「カッコウの部屋 кукушкина」とよばれていた。

2012年にこの「カッコウの部屋」関連資料がフランスからロシアへ移動したのに際し、本稿筆者は2013年4月と2016年9月にモスクワで調査を実施した。¹ ここには、作家の創作活動を包括的に理解するために欠かせない私物等の資料も多く含まれる。本稿ではこれらのうち、作家の晩年の暮らしぶりを明らかにするゲストブック「黄金の書」といくつかの新発見の資料について、現時点での意味づけを行う。

1. ナタリヤ・レズニコワと「黄金の書」

2012年、パリ在住のエゴル・ダニロヴィチ・レズニコフ氏所蔵のレーミゾフ関連資料の大半が、氏の手を離れ、その管理をモスクワの国立文学博物館に委託された（博物館への移送は翌13年）。レズニコフ氏は、晩年の作家を公私にわたって支えた亡命ロシア人、ナタリヤ・レズニコワ（1903-1992）の長男である。レズニコフ一家は1957年のレーミゾフ死後、50年以上にわたって、作家の大量の遺品を保管していたことになる。度重なる移転や戦争によって多くの資料が散逸したことを作家本人はたびたび嘆いたが、この作家の「物」への執着は、大量の遺品がそれを示しており、それを散逸させずに維持した功績はきわめて大きい。なお、2013年春、モスクワで、これら資料の「帰国」を記念する展覧会「帰還」（«Возвращение»）が開催された。

¹ 本研究はJSPS 科研費 JP24520367 の助成を受けている。2016年のアーカイヴ調査に際しては文学博物館のアンナ・ウリュエピナ博士にご協力いただいた。This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP24520367. I received generous support from Dr. Anna Urjupina (The National Museum of Russian Literature, Moscow).

そもそも、レーミゾフとナタリヤ・レズニコワが 1920 年代のパリで親交を結び、その後長きにわたって親しい関係が続けたことには、運命とも呼べるような背景がある。²

ナタリヤの母オリガ・エリセエヴナは、1840 年から 50 年代にかけて活躍した作家エリセイ・コルバシン（Елисей Яковлевич Колбасин 1831-1885）の娘で、幼少から文学に囲まれて育ち、長じて様々な刊行物の編集・出版に携わるようになる。アカデミーでレーピンの薫陶を受けた画家ミトロファン・フォドロフとの最初の結婚でナタリヤとオリガの双子の姉妹をもうけるも離婚、母は双子を連れて、エス・エル党の若きリーダー、ヴィクトル・チェルノフと再婚した。この二人目の夫ヴィクトルの兄、ウラジーミルに、「北のアテネ」と呼ばれた 20 世紀初頭のヴォログダで、若きレーミゾフは出会っている。学生デモの扇動者として逮捕されたレーミゾフは北方ロシアで革命家たちの知己を得、彼らとの交流は首都帰還後も続けられた。流刑地で文学に「転向」後、レーミゾフが政治活動に関わることは二度となかったものの、生涯を通じて作風にあらわされていた弱者への同情的な眼差しは、チェルノフ兄弟と親交のあったレーミゾフがナロードニキの後継となるエス・エルに深い共感を抱いていたことからであろうと合点がいく。

1905 年、夫が編集を務める機関紙「ジェロ・ナローダ」の文学部門で編集者として働いていたオリガが、同紙にレーミゾフの『時計』（*Часы*）掲載を提案、オリガが作家と知り合ったのはこの時だったが、その後、二つの革命が両者を遠ざける。チェルノフ一家はイタリアに亡命、1917 年にようやく帰国する。ところが、10 月革命後、オリガと娘たちは、まだ幼い三女アリアドナも含めて逮捕・投獄されてしまう。ボリシェビキに敵対するチェルノフの妻子であれば当然の仕打ちであったろうが、1921 年に釈放されると、母娘はかつてイタリアで親交のあったゴーリキイの骨折りで亡命、こうして渡ったベルリンで、同じく祖国を逃れてきたレーミゾフ夫妻と再会するのである。

終生文学に携わった母親と同じく、文学と芸術を愛した姉妹たちが、それぞれ文学者と結婚したのもうなずける（ナタリヤは詩人ダニル・レズニコフと、オリガは同じく詩人・作家で、作家レオニード・アンドレーエフの息子のワジム・アンドレーエフと、アリアドナはジャーナリストで文芸評論家のウラジーミル・サシンスキイと結婚

² ナタリヤ・レズニコワの回想は、レーミゾフ研究のみならず、亡命ロシア文化研究全体にとって第一級の史料である。レズニコワの家族や経歴について、レズニコワ回想に付されたグラチヨワの以下の解説を参照した。Грачева, А.М. «Огонь любила и знала очень давно...»: Алексей Ремизов в судьбе и творчестве Натальи Резниковой // Резникова Н.В. Огненная память. Воспоминания об Алексее Ремизове. СПб., 2012. С. 3-28.

した)。母と娘、その夫たちは、祖国を離れ、物質的にいかに困窮しようとも、「古き良きロシア知識人」の典型であり続けた。ナタリヤ・レズニコワと姉妹たちのレーミゾフに対する無償の献身には、作家に対する尊敬の念は勿論、母から受け継がれた、そして亡命によってさらに強まったであろう、ロシア文学そのものへの思慕が反映されている。「私が訪ねていくと、A. M.は〔中略〕彼が一番気にかけていること、つまりロシア文学の精神について話し出す。〔中略〕プーシキンから現代まで、すべてのロシア文学は、抑圧される者、困窮する者、国を追われる者のための精神的支柱だった」。³ 三姉妹とその夫たちは、1920年代から30年代にかけて、亡命作家として出版の道を絶たれたレーミゾフの収入の足しにしようと、彼の制作した「絵入りアルバム」を、文字通り売り歩いたり、亡命ロシア人たちを対象に「朗読の夕べ」を組織したりもした（これも作家の収入となった）。戦争中も彼らの物心両面の援助は（彼ら自身はパリにいなかったにもかかわらず）続き、戦後はナタリヤ・レズニコワが、秘書として、ほぼ目の見えないレーミゾフの、仕事のみならず生活全般にわたって世話をやいた。1950年、レーミゾフの本を出版するため、パリに非営利的出版社「オペシニク *Оплешник*」を創設したのもこの家族であり、1957年のレーミゾフの死までに出版したレーミゾフの著書は、合計8冊にのぼる。⁴

さて、文学博物館全体に委託された遺品は、写真、モノ、紙の資料類に分類され、それぞれ別のアーカイヴに保管されている。うち、モスクワの文学博物館に収蔵された資料は、おもにレーミゾフ最晩年（1947-1957）、および、それより数は少ないが、より早い時期（1870～1930年代）の資料（手稿、イラスト、カリグラフィー作品、日記、書簡等だが、蔵書、パスポート、家族の写真）で、以下の11項目に区分されている。

(1) レーミゾフ手稿⁵ (2) 妻への書簡 (3) その他の書簡 (4) レーミゾフ宛書簡 (5) 作家の自伝的資料 (6) レーミゾフによって収集された資料 (7) 彼に関する資料 (8)

³ Резникова. Огненная память. С. 97.

⁴ Повесть о двух зверях: Ихнелат. 1950; Бесноватые: Савва Грудцын и Соломония. 1951; Мелюзина. Брунцвик. 1952; Мышкина дудочка. 1953; Огонь вещей: Сны и предсонье. Гоголь. Пушкин. Лермонтов. Тургенев. Достоевский. 1954; Мартын Задека. 1954; Тристан и Исоolda. Бова Королевич. 1957; Круг счастья. 1957.

⁵ 分類は全て文学博物館による。レーミゾフ手稿はさらに以下の11項目に分類される。(1) 長編小説、長編の自伝的散文、(2) 中編小説、(3) 夢、夢占い、(4) 小品（短編、スカースカ、伝説、スカース、抒情詩）、(5) 詩、(6) 論文、(7) 日記、メモ、覚え書き、(8) 他作家の作品からの引用、抜き書き、(9) 妻の日記的覚え書きや書簡をレーミゾフが清書し、コメントをつけたもの、(10) レーミゾフによって編まれた選集、(11) レーミゾフ作品の他言語への翻訳。

妻の資料 (9) レーミゾフ親族関連の資料 (10) レズニコワの資料 (11) そのほか。⁶

このうち、(5) の「レーミゾフ伝記的資料」はさらに以下の3つに区分される。(5-1) 作家の個人的資料、(5-2) ゲストブック「猿類大自由院の黄金の書」(1号から7号まで全7冊)、(5-3) その他創作活動に係る記録。

これらの資料のなかでも、おそらくもっとも一般の興味を惹くであろうものは、作家が「黄金の書 Золотая книга」と名付けたゲストブックである。作家は死の直前まで、日々のあれこれをノートに書き留めていたが、視界が狭められるなか、やがてノートを自宅への訪問客に手渡し、サインや絵を描いてくれと求めるようになる。1951年1月から1957年11月まで、ブアロ通りの「カッコウの部屋」を訪れた実質すべての客が、「黄金の書」に名前を留めることになった。署名とイラストの横には通常、日付が付される。客の書いたページに作家がコメントを書き加える場合もある。こうして「黄金の書」には、複数の国籍の、錚々たる面々、例えば、ベヌア、ドブジンスキイ、ロジャンコフスキイ、ザイツェフ、ガスダーノフ、ルジェフスキイ、プレーゲル、バフラーフ、アダモーヴィチなどなどが、名を連ねた。

「黄金の書」に残された絵やサインからは、苦しいながらも生活を楽しもうとする作家の姿がうかがえる。レズニコワをはじめ、精神的、物質的支援者に恵まれて、レーミゾフは、一般に長らく流布していたイメージほど孤独ではなかった。レズニコワの回想には、以下のように記されている。

コドリャンスカヤの本に引用された A.M. [レーミゾフ] の手紙の多くは、あきらかに、彼の生活のもっとも陰鬱な情景を描き出すために書きぬかれたものだ。たとえば、パリには A.M. がじぶんの作品を読み聞かせられる人がいなかった、というような。ところがこれは真実ではない。当時パリには A.M. の友人がたくさん住んでいた。つまり作家や、芸

⁶ 項目 (8) (9) (10) はレーミゾフ夫人セラフィーマ・パヴロヴナ資料。レーミゾフ本人の所有物のほかに、レーミゾフ夫人セラフィーマの遺品(書簡、日記、メモ等)も多数ある。レーミゾフが、自著のみならず、他人の筆によるものまでをも繰り返し創作に活用していたことはこれまでたびたび指摘されているが、文学博物館およびペテルブルグのプーシキン館による現在進行中の調査からは、夫人の手紙や日記を活用していた詳細が明らかになりつつある。具体的には、妻の死(1943年5月13日)後、レーミゾフは彼女の残した文書や書簡を体系立てて整理したばかりでなく、それらに文学的改作を施し、これをもとに、より大きな創作を準備していたとみられる。したがって、妻の資料はレーミゾフ作品の実証的研究の点から見ても大変貴重なものである。

術面で彼に近い友人が。⁷

レーミゾフを文学の師と仰ぐ児童文学者、ナタリヤ・コドリャンスカヤ(1901-1983)とレーミゾフの共著『アレクセイ・レーミゾフ』(1959)は、出版直後から長らく、レーミゾフ研究の基本文献であった。⁸ 作家の生い立ちから書き起こし、書簡、日記、イラスト、インタビュー、レーミゾフの筆によるイラストも多数収録されている。とはいえ、この本にはたしかに、レーミゾフのパリでの境遇の悲惨さばかりか、過去の不幸までも読者に強く印象付けるような挿話が多く掲載されている。

1919年に祖国を離れたコドリャンスカヤは、レーミゾフとは1940年に知り合う。第2次大戦中は夫とアメリカに亡命、カリフォルニアに居住しながら、パリを含むヨーロッパをたびたび訪れていた。

コドリャンスカヤがレーミゾフと共著を手掛けることになった経緯は以下のようなものである。⁹

1955年、ソ連で出版されたアカデミー版『ロシア文学史』を読んだレーミゾフは、その中の自分の扱いに衝撃を受ける。20世紀初頭のロシア文学の展開についての概説において、レーミゾフはほんのわずかに、しかも否定的に言及されているに過ぎなかったからだ。その創作は「むき出しの、形式主義的な『革新』」であり、亡命者である作家本人も、「ソヴィエト・ロシアの最悪の敵」に加担した人物とされていた。¹⁰

上記の記述を作家が目にしたのは80歳の誕生日も間近の時だったが、その頃、オリガ・エリセエヴナが中心となり、友人たちがレーミゾフとの出会いについて回想録を出版する話がもちあがっていた。当初、作家はこのプロジェクトをおおいに喜んだ。ところが、上記の文学史を読み、傷ついたレーミゾフは態度を変える。自分で、自分について、書くことを決めたのである。当時、レーミゾフと密に連絡を取っていた一人に、駆け出しの作家ナタリヤ・コドリャンスカヤがいた。レーミゾフは彼女に懇切丁寧に「書き方」を教え、彼女の童話の書き直しまで行う一方、これが縁となり、彼女と実業家であるその夫から、経済的支援を受けるようになる。夫妻はアメリカから物資を送り、パリの部屋代を肩代わりした。そしてレーミゾフは、自分を語る共著者にコドリャンスカヤを選び、こうして出来上がったのが、著者の名前にコドリャンス

⁷ Резникова. Огненная память. С. 207.

⁸ Кодрянская Н.В. Алексей Ремизов. Париж, 1959.

⁹ Грачева. «Огонь любила и знала очень давно...» С. 7-10.

¹⁰ Орлов В.Н. Поэзия буржуазного упадка. Раздел I // История русской литературы: В 10 т. М.; Л., 1954. Т. 10: Литература 1890-1917 годов. С. 772-774.

カヤを冠した、ほぼレーミゾフの筆による著書『アレクセイ・レーミゾフ』だった。

『アレクセイ・レーミゾフ』の20年後にパリで出版された『手紙のなかのレーミゾフ』¹¹に、レーミゾフから夫妻への謝辞があふれているのにも、上記のようなわけがある。「創作」の要素が多分に含まれる『アレクセイ・レーミゾフ』を、したがって、そのまま「事実」とすることはできないのである。

2. チャプスキとニキーチンとレーミゾフのオリエンタリズム

レズニコワが言及した、晩年のレーミゾフを頻繁に訪ねた友人たちのなかに、ある亡命ポーランド人がいた。パリの亡命ポーランドの雑誌『クルトゥラ』の編集者ユゼフ・チャプスキ (Józef Czapski 1896-1993) である。¹² 第2次大戦後にパリに永住することになるチャプスキは、美術や文学評論をものし、自身も画家だった。ふたりは、チャプスキが心酔していたドミートリイ・フィロソフの紹介を通じて知りあう。チャプスキは晩年のレーミゾフをしばしば訪れ、両者は親交を温めた。とはいえ、互いの芸術のよき理解者として、強い印象を与えあったその影響関係について、先行研究では看過されてきた。

1951年に『クルトゥラ』誌に掲載されたチャプスキの短いエッセイ「ロシアの山々」¹³によると、チャプスキとレーミゾフは1920年代後半、ディアギレフのバレエ公演の際に出会うが、それに先立ちチャプスキは、ベルリンからワルシャワに戻ったばかりのフィロソフから、この作家についての高い評価を聞いていた。ところが当時のチャプスキは、ローザノフやベールイを愛読していたにもかかわらず、レーミゾフについ

¹¹ *Кодрянская. Ремизов в своих письмах. Париж, 1964.*

¹² ユゼフ・チャプスキは1896年、貴族フッテン＝チャプスキ家の長男としてブラハに生まれ、幼少期の殆どをミンスク近郊プシウキ (Przyłuki) の家族の領地で過ごす。東部国境地帯の多言語・多文化地域で成長したことは、のちの彼のコスモポリタニズムにも濃い影を落としている。ペテルブルグのギムナジウムに学び、10月革命に伴いポーランドに帰国。ロシア内戦時にポリシェビキ捕虜となったポーランド人行方不明者を探す任務をもって再びペテルブルグへ入り、この時、メレシコフスキ、ギッピウス、フィロソフらロシア象徴派の知己を得る。1924年パリ移住、絵画運動「カピスト」のメンバーとして活動するが、徐々に評論家の仕事に比重を移す。1939年ポーランド軍再入隊。ロシア軍捕虜となるが、20000人以上が犠牲になったソ連軍によるポーランド軍将校虐殺を免れた395人のうちの一人となる。ドイツ軍のロシア侵攻後、アンデルス將軍指揮下のポーランド第二師団に入隊、これらの経験を二冊に著し (*Wspomnienia starobielskie* 1944, *Na nieludzkiej ziemi* 1949)、いわゆる「カティンの森事件」を世界で最初に活字化した。1946年以降をパリに暮らす。グスタフ・ヘルリング＝グジンスキ、イエジ・ギェドロイチとともにパリに文学研究所を創設、亡命ポーランドの最大かつ最重要雑誌『クルトゥラ』主幹を務めた。

¹³ Józef Czapski, "Montagnes russes," *Czytając*, 1990, s. 189-201.

ては、「象徴派詩人たちの親友」という認識に留まり、作品を読んだこともなかったという。しかしながら、1938年のある日、偶然、レーミゾフの小説『音楽教師』の断片のフランス語訳を雑誌 (Nouvelles Littéraires) に発見、俄然この作家に興味を持つ。そして、こんなにも長いことパリに住んでいながら、一度もレーミゾフを訪問したことがなかったことを悔いるのである。その後、ついにチャプスキがレーミゾフを個人的に訪問するのは1951年のことで、エッセイには、快く出迎えてくれた部屋の主人の様子がいきいきと描かれている。こうしてチャプスキは、社会主義ポーランドから遠く離れたパリで発行される亡命ポーランドの雑誌を通じて、レーミゾフをポーランド語読者に最初に紹介した一人となった。

件のアーカイヴには、「黄金の書」所収のチャプスキの絵とサイン (fig. 1)¹⁴ と、彼の妹で文筆家のマリア・チャプスカの筆による、同様の絵とサイン、また兄妹からレーミゾフに宛てたロシア語及びフランス語の書簡が含まれる。マリアもレーミゾフの愛読者だった。

「ロシアの山々」のおよそ7年後の1958年1月、チャプスキは、自身が編集する『クルトゥラ』に、「ヒマラヤ杉」と題した追悼文を寄稿している。¹⁵ 前年11月に亡くなったレーミゾフを偲ぶもので、そのタイトルは、以前レーミゾフのためにチャプスキが翻訳した、ポーランドのロマン主義の詩人ツィプリアン・カミル・ノルヴィットの詩に由来する。この詩中、ノルヴィットは詩人を、「庭園」ではなく「荒地」に生えるヒマラヤ杉に譬えた。この比喻をうけてチャプスキは、年老いたレーミゾフが、いかなる文学流派にも属さない孤高の作家であること示唆している。かつて死期の近いレーミゾフは突然ノルヴィットを引用して、「私には、孤独と静けさと荒地が必要だ」とチャプスキに言ったからであり、それがふたりの最後の面会となった。¹⁶

高い額が禿げあがった、この賢老人に会うたびに、わたしはなにかしらに目を開かされた。ロシアは中国と国境を接していると言う。占領中の困難な時期、ふしぎな切り絵や自作の抽象画が、彼のアパートの薄汚れた壁を、高価な中国の織物のようにずっと飾っていたのである。奇妙なサイコロ、金色の松ぼっくり、魚の骨、木の根、などなどが、天井からずらりと糸で吊るされていた。古い木箱でつくられた本棚には、本と手稿がぎっしり詰まっていた。[...] このドストエフスキイとゴーゴリの息子は、東と西の伝説を、ノルマン

¹⁴ Ф. 156_оп. 2_ед. 946_л. 25.

¹⁵ Józef Czapski, "Cedr," *Kultura*, 1958, № 1, s. 176-179.

¹⁶ Ibid. s. 176.

ディとスコットランドと、ペルシャとロシアを、巧みに混ぜて、パリの静かな通り沿いの、このありふれた 16 平方メートルの魔法の島で、ひとつにすることができたのだ。

追悼文の中でチャプスキはレーミゾフの文学、イラスト、カリグラフィーに惜しめない賛辞を送っている。そして「あらゆる退屈な言葉に抗う」、「中世ロシアの巨匠」であるレーミゾフが、「ジダーノフが作成したリストに、貶められ発禁された形式主義者として、真っ先に載せられていたことも不思議ではない」と述べて、帰国を願いながらもソヴィエトから冷遇され続けた、この「ロシア語の名手」を擁護した。¹⁷

ところで興味ぶかいのは、上記引用のようにチャプスキの弔辞が、レーミゾフの芸術に、「東」と「西」の融合を指摘していることである。こうした見方は、画家であり美術評論家でもあったチャプスキの資質が影響している一方、彼の生まれ育った多文化的環境とも関係があるかもしれない。しかし何より大きな要因は、1950年代という時期的なものである。というのも、チャプスキが頻繁にレーミゾフを訪れるようになった1950年代以降、作家は1910年代からの構想を実現すべく、精力的にアジアのフォークロアの再話を執筆するようになるからである。

たしかにレーミゾフは、すでに1910年代から東洋への憧憬を抱き、コーカサスやシベリアやチベットの民俗を基にしたフォークロア的作品の構想を練っていた。さらに1920年代にはパリのユーラシア主義に接近、グループの雑誌「里程標」に寄稿もしている（その接近の動機は「政治的」ではなく、あくまで「文学的」なものだったが）。

一方、1950年、『二匹の獣の物語。イフネラト』が刊行される。出版社「オペレシニク」が出版した記念すべきこの第一作は、古代ロシア文学に取材しているものの、そのストーリーの起源はインドの説話『パンチャタントラ』、及びそれから派生した、アラビアの『カリーラとディムナ』にあった。レーミゾフにこの物語を教えたのは、レーミゾフのアパートの、まさに隣に住む東洋学者のワシーリイ・ニキーチン、1919年以来パリに住む亡命者であった。「黄金の書」に残された自画像の太い線からは、快活な人物像が想像される。(fig. 2)¹⁸ レーミゾフがスーフィズムに影響を受けていることは先行研究でもたびたび指摘されてきたが、その知識をレーミゾフに授けたのも彼であり、レーミゾフにとっての「東洋への窓」ともいえる人物である。その名は戦後の日記に頻繁に登場し、レーミゾフはニキーチンを、アラビア語で貴人の称号を意味する「エミール (эмир)」と呼んで慕った。晩年、集中的に東洋の説話を改作したことに

¹⁷ Ibid. s. 177.

¹⁸ Ф. 156_оп. 2_ед. 946_л. 41.

は、この隣人の存在が大きく影響している。¹⁹

さて、ニキーチンはレーミゾフの死後に発表した回想「カッコウの部屋（レーミゾフの思い出）」で、作家宅の訪問客について記しているが、そこに「頻繁な客」として名前をとどめるのがチャプスキである。²⁰ 先述のように 20 世紀初頭の流刑地でレーミゾフがポーランド人達と交流をもったことはよく知られ、また、妻セラフィーマがリトアニアの出自を持つこともポーランドへの愛着の一因であったが、晩年のレーミゾフの目をこの国に改めて向けさせたのは、自分のためにノルヴィトを翻訳し、ポーランド文学史を講義してくれた、亡命ポーランド人のチャプスキだった。²¹

3. レーミゾフと日本：米川，成井，ブブノワ

日本におけるロシア文学の翻訳の流行とともに、実はレーミゾフは 1910 年代という早い時期から本邦に紹介されていた。とくに 1924 年だけで 3 編が翻訳されているが、そのうちの一篇の訳者が米川正夫である。邦訳三作目となる「まめな看護婦」（*Сестра усердная*）²² で、翻訳雑誌『世界文学』の 6 月号に掲載されたのち、ソヴィエトの作家を集めた米川の翻訳集『労農ロシア小説集』²³ に収録、これはレーミゾフ存命中に刊行された最後の日本語訳作品となった。雑誌版に付された米川の解説は、レーミゾフのドストエフスキイからの強い影響や、作家の古い言葉への関心等を指摘し、正鵠を射ている。大正時代の日本文壇におけるレーミゾフ評のほぼすべてが、同時代ソ連で出版された記事を引き写した紋切型だったことを考えると、この作家に対する米川のある程度深い関心が看取される。

そのほぼ 30 年後の 1953 年 9 月、米川がパリのレーミゾフ宅を訪問し、「黄金の書」にサインを残していることは興味ぶかい。ニキーチンが「ある日本人」の来訪について記している。「彼ら〔訳注：レーミゾフ宅訪問者〕のうち、ある日本人がいた。東京

¹⁹ 創作経緯について、例えばレーミゾフからコドリャンスカヤに宛てた 1949 年 10 月 8 日付手紙を参照。*Кодрянская, Ремизов в своих письмах*. С. 145.

²⁰ *Никитин В.П.* Объяснительное слово к «Суфийской мудрости», Переписка А. М. Ремизова и В. П. Никитина, Никитин В. П. «Кукушкина» (памяти А. М. Ремизова). Воспоминания. Публ. и коммент. Н. Ю. Грякаловой // *Ремизов А.М.* Павлиным пером. СПб., 1994. С. 191-238.

²¹ ニキーチン自身も、ソスノヴェウツ出身でワルシャワのギムナジウムを卒業したポーランド系であり、回想からはチャプスキを「同郷の人」と見て親愛の情を抱いていたことがうかがわれる。

²² 米川正夫訳「まめな看護婦」『世界文学』金星堂、1924 年。

²³ 米川正夫「まめな看護婦」米川正夫編訳『労農ロシア小説集』金星堂、1924 年。

大学のロシア文学の教授だ」。²⁴

米川自身はレーミゾフ訪問を以下のように回想している。²⁵

[...] 書齋にはニキーチンとって、ペルシャの領事を十六年も勤めた東洋通がいた。東洋関係というので、レーミゾフがわざわざ呼んだらしい。主人その人は嬉しさにわくわくして、いきなり黄金の書なるものを取り出した。これは要するにサイン帳で、特殊の人に署名を求めるためであるが、別に金箔で飾ってあるわけではなく、ありふれたメモの手帳に過ぎない。画も必ず描いてくれというので、子供の自分によく描いた日本美人をものした。主人はそれを手に取って見て、あっと低い叫を上げた。聞けば、この黄金の書は右ページに書かなければならぬところを、私が左側に書いたからである。[...] 記念に写真を撮ろうということになって、私と同行した成井画伯がカメラを向けた。夕方の光線が薄いので窓を開けたら、レーミゾフは風邪をひくから閉めてくれと、泣きそうな声を出す。

私が、あなたはドストエーフスキイやレスコフの影響を相当に受けられたようですが？と訊いても、レーミゾフはダーダー、というばかりである。[...] 例の書店の主人はレーミゾフのことを、「パトリアルカルな人」と云ったが、私はそれよりむしろ「アルハイックな人」と云った方がぴったりすると思った。とまれレーミゾフは一種の奇人と云えるけれども、善良無比な老人である。

米川と、引用文中の「成井画伯」の署名とイラストは1953年9月10日付で、二人の書いた二枚は「黄金の書」第4巻中の頁の表裏になっている (fig. 3) (fig. 4)。²⁶

成井弘文（本名はヒロブミ。コウブン、のちに弘（コウ）として活動。1910-1999）は1937年に東京美術学校を卒業、戦後より本格的に画業を開始した洋画家で、1952年に渡仏、藤田嗣治に指導を仰ぎ、パリ派の画家たちの薫陶を受けた。米川は、この成井と、劇作家・岸田國士の姪、やさ子の媒酌人であった。米川の渡仏は成井のその翌年あたり、パリ滞在中に成井を訪ねた思い出を綴ったエッセイがある。(fig. 5)²⁷ 米川はこの新進画家を、レーミゾフ宅にも連れていったのだった。

²⁴ Никитин. В.П. «Кукушкина» (память А. М. Ремизова). Воспоминания // Ремизов А.М. Павлиньим пером. СПб., 1994. С. 228

²⁵ 米川正夫『ソヴェート紀行』角川書店、1954年、179-182頁。引用に当たって、文中の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに、旧字体を当用漢字に直した。

²⁶ Ф. 156_оп. 2_ед. 949_л. 43, 43об.

²⁷ 米川正夫「成井君のこと」『造形』3月号（通算13号）、昭和31年、16頁。写真も同頁。

1953年のレーミゾフ訪問は米川によい印象を残したようだ。²⁸ 日本に帰国後も、米川は在仏の亡命ロシア作家と熱心に手紙をやりとりしており、親しかったボリス・ザイツェフに、レーミゾフへの挨拶の言伝を頼んでいる。「東京のヨネカワから手紙を受け取りました。チェーホフの夕べを開催したそうです。観衆は3000集まったそうです。[...] ヨネカワがあなたによろしくと書いています」(1954年10月13日付レーミゾフ宛書簡)。²⁹

米川からの挨拶をザイツェフが伝えたかどうかは定かではないが、本調査ではこのほか、別の書簡にヨネカワの名を発見した。それは1954年11月19日付ザレツキイからの書簡中で、ここでもう一点興味を惹くのは、同文中に、日本在住の亡命ロシア人、ワルワラ・ブブノワの名があったことである。「東京のブブノワが、あなたがヨネカワを覚えているかと訊いてきた。彼はあなたを訪ねていったはずだ、ロシア文学の翻訳者で、ドストエフスキイのことをよく知っている」。³⁰

ペテルブルグのアカデミーに学び、ロシア・アヴァンギャルドの芸術家に数えられるブブノワは、1922年、母と連れ立って、妹の嫁いだ日本に発ち、その後思いがけず36年もの間この地に留まることになる。そのブブノワとレーミゾフの交流は、革命前も、両者の亡命後も、これまで確認されたことはなかった。

ブブノワの名は上記の手紙に登場するほか、彼女自身がレーミゾフに手紙をしたためている。1954年12月6日付で、封筒に入れた絵葉書3枚である。³¹

²⁸ 同じくパリ滞在中に訪問したブーニンについての感想の書き方と対照的である。例えば以下。「パリでは二十日ばかり過ごしたが、ここではすぐれた天分を持ちながら、祖国を見棄てたためにドストエフスキイのいわゆるポーチワ(土地、地盤)を失った亡命作家の末路を見たことが、何よりも印象深かった。ことにわからずやの頑固じじいのタイプに墮した、ノーベル賞作家のブーニンは、私に無量の感慨を催させた」。米川正夫『鈍・根・才 米川正夫自伝』河出書房新社、185-186頁。

²⁹ なお、東京のチェーホフの催しについて米川が自著でたびたび触れている。例えば以下。「チェーホフの死後五十年祭を、1954年、日本ロシア文学会主催で、やはり日比谷公会堂で行った」。前掲書、189頁。

³⁰ Ф. 156. Письмо Зарецкого Н. В. Ремизову А. М.

³¹ Ф. 156. Письмо Бубновой В. Ремизову А. М. (1枚目表) № 1./6/XII 54/Многоуважаемый Алексей Ремизов!/ Простите, не могу назвать Вас иначе! Благодарю Вас за Вашу книгу. Меня трогает Ваше внимание, Ваши рисунки и имена тех Великих наших, которые значатся на титульном листе книги /Пока успела лишь / Получила книги 5го декабря

(2枚目表) № 2/перелистать ее и оттуда на меня пахнула(о) мудростью. Не узнаю всех цитат/Нет ли среди них и Ваших?/Шлю Вам привет с Востока. Он тоже мудрый:/№ 1., надпись означает“Освоение всех глубин”(слева на-право, или наоборот?)/№ 2- “Тихое житие Его уже здесь нет, и даже манера изображать его перекинулась на Запад отчасти к Ал. Ремизову

これを書いた前日、すなわち 1954 年 12 月 5 日にレーミゾフからの献本を受け取った、その礼を述べているが、レーミゾフの父称を知らないのを詫びていることから、両者の直接的なやり取りとしてはこれが初めてであるのがうかがわれる（1 枚目表）。また、「東洋から挨拶を送ります。東洋もまた賢いものです」というから、自らの住まう「東洋」的な絵葉書を意識的に選んだのであろう。1 枚目裏面には書（「自得」）、2 枚目裏面には池大雅の「十便十宜図」が描かれており、ブブノワはこれらの文字・図案への注釈を付している（2 枚目表）。

前述のように両者の交流はこれまでまったく確認されていなかったが、この二人を仲介したのは画家のニコライ・ザレツキイであったかもしれない（「ザレツキイに会ったらよろしく伝えてください」³²（3 枚目裏））。3 枚目裏は、余白上部に Автолитография の自筆の書きこみ、また「第 2 回日本版画院展 少女像 ブブノワ」と印刷にある通り、自らの版画から作られた絵葉書である（3 枚目裏）。(fig. 6) 自己紹介も兼ね、今後も交際を継続させたい旨を書き、筆をおいている。故郷を離れた者同士の共感をもって書かれた文面である。

レーミゾフは時代によってまったく異なる画風を展開したが、晩年、その絵は、より簡素なものに変化し、時に水墨画のような様相を呈するようになる。こうした画風の変化にはいくつかの物理的理由がある。³³ とはいえ、日本画壇で地位を築いたブブノワから届いた、書や水墨画をあしらった絵葉書からは、晩年のレーミゾフがますます東洋への関心を深めていたことと、ある種のシンクロニズムを看取できるのではないだろうか。この手紙に対するレーミゾフからの返事の有無、東京のブブノワへの献本への経緯等は不明で、調査は継続中であるが、成井の関係も含めて、もし日本画壇となんらかの交流があったとすれば、レーミゾフ研究にとってもきわめて興味ぶかい

（3 枚目表） № 3 А это мое искусство. Вы меня простите. Я старая, но человек новый и всеми корнями привязана к России и приемлю ее такой, какой она была, есть и будет. История идет своим логическим путем и создает всегда новые красоты. Ненужное истлеет и человек новый выметет его. Будьте здоровы и бодры

Увидите моего друга Н. В. З(арецкий).- привет передайте.

М. Б. Не прерывать связи?

Была бы очень рада! В. Бубнова

（3 枚目裏） Автолитография

Японские девушки часто похожи на юную Клеопатру, царицу.

³² ザレツキイは 1920 年に祖国を離れ、22 年から 31 年までベルリン、31 年から 50 年までプラハに住み、51 年にパリへ移住した。各都市で展覧会を組織、レーミゾフも参加している。

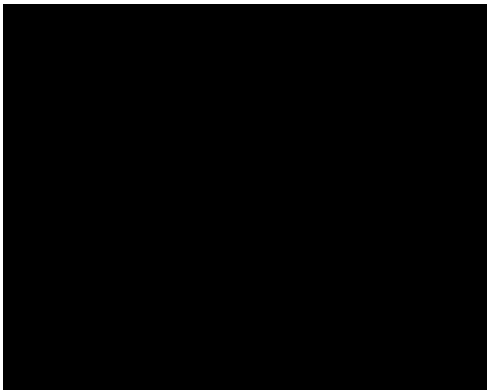
³³ 困窮のため新しい筆を買えず毛の抜けた古い筆で描き続けたことや、視力の悪化により細かい線を描くのが難しくなったこと等。

事実である。

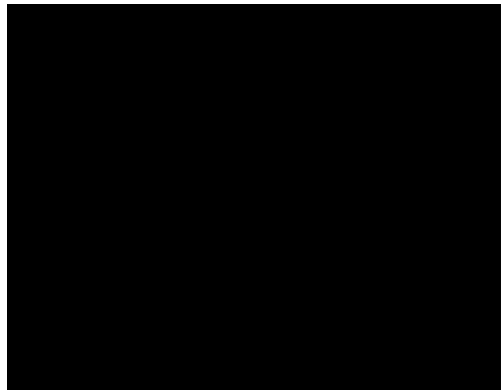
おわりに

レーミゾフの最後の小説『音楽教師』の主人公コルネートフは、モスクワに生まれ、ペテルブルグからベルリン、パリへと渡ってきた亡命者で、祖国に忘れ去られた孤独な変人とされる。これは、その履歴から言っても、レーミゾフがくりかえし描きつけてきた、卑屈な自己像のヴァリエーションである。ところが1950年代のレーミゾフ自身は、失明しつつあったとはいえ、70を超えていまだ創作意欲にあふれ、同時代人たちとも活発に交流する、いわば「文化サロンの主人」だった。レーミゾフはときに「事実と反対のことを書くのを好んだ」³⁴が、晩年の資料が上記のように、作家自身が作った虚像を正しているのであり、とくに「黄金の書」は、文化人たちの手稿の集積として、このノート自体がひとつの貴重な作品でもある。

来客をおおいに好んだ老レーミゾフのアパートで、訪問者は皆、喜んで自らの足跡を残したのである。

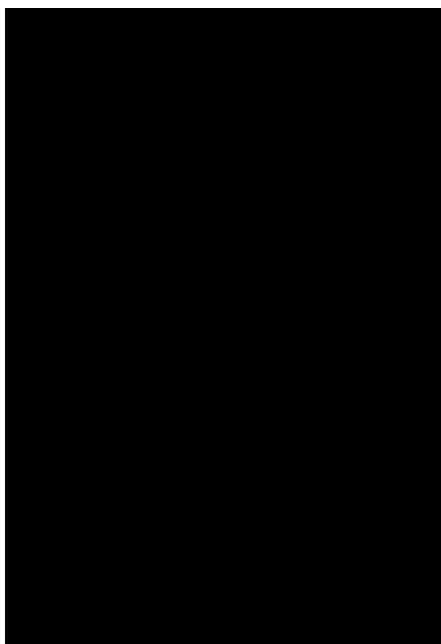


(fig. 1)

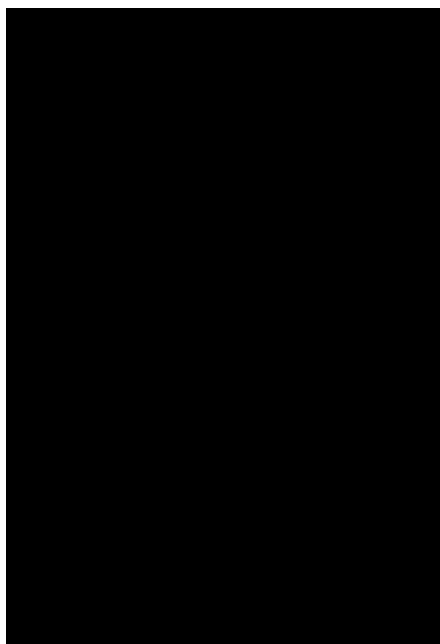


(fig. 2)

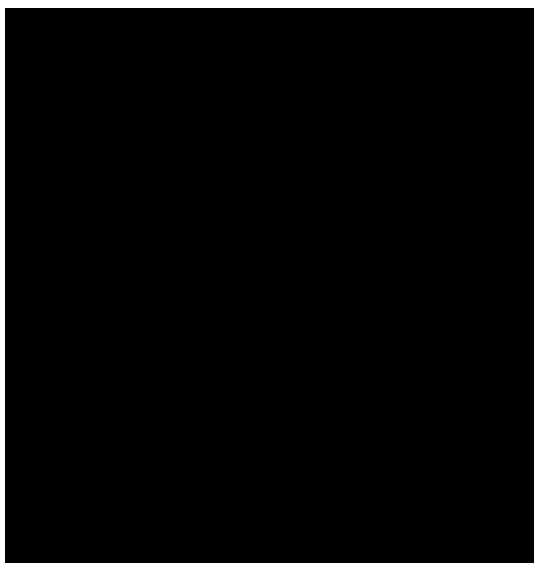
³⁴ Резникова. Огненная память. С. 207.



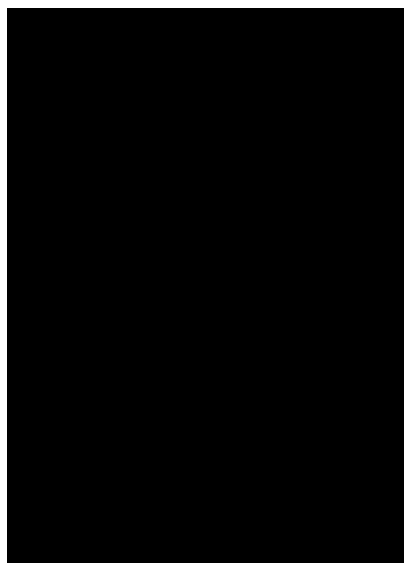
(fig. 3)



(fig. 4)



(fig. 5)



(fig. 6)

The Intersection of Émigrés in the 1950s: Remizov's "Literary Salon" in Paris.

OGURA Hikaru

Most of the materials relating to Remizov that were owned by Iegor Reznikov, who lived in Paris, were entrusted to the Literary Museum in Moscow in 2012 for management and preservation. Mr. Reznikov was the son of Natalia Reznikova, a Russian émigré who supported Remizov in the later years of his life.

After Remizov died in 1957, the Reznikov family stored numerous items left to them by the author for over 50 years. While the author himself often lamented the loss of the many materials that were scattered due to wars and becoming an émigré, the massive amount of items left behind by the novelist demonstrates his attachment to “things.” He was even teased by Ivan Bunin in the past for never throwing away his manuscripts. It is a grand achievement that the family had preserved those items without breaking up the collection or losing them.

The materials are categorized into 11 groups, and among them, what particularly attracts the interest of many people, are the guest books called the “Golden Books” in seven volumes. After he lost his eyesight in his later years, he wrote various things about his everyday life in his notebooks, and over time, handed them over to visitors to his home and asked them to draw signs and pictures in them. Thus, from 1951 to November 1957, virtually every guest who visited his home wrote their names in one of the notebooks. From the pictures and signs left by the guests, you can envision Remizov trying to enjoy life despite his troubles.

Focusing on the guest books and letters owned by the Museum, this paper elucidated the interactions of the people of culture in Remizov’s apartment in Paris and the influential relationships among them.